

読書のすゝめ

立志館ゼミナールから、この夏おすすめの本を紹介いたします。おもしろそうに思える作品があれば、ぜひ読んでみてください。

旅猫リポート

有川 浩（ありかわ ひろ） 講談社文庫
久常先生

この話の主人公、いや、主猫は元野良猫のナナ。瀕死のところを助けてくれた、サトルという青年と暮らし始めます。昔飼っていた猫に似ていると言いつつも、自分を大切にしてくれるサトルに、ナナも心を許していきます。しかしそれから五年後、二人は「ある事情」により一緒に住めなくなってしまう。「大事にしてくれる人に、ナナを引き取ってもらいたい」と考えたサトルは、ナナを連れて二人で「最後の旅」に出るので



サトルと旧友たちのやりとりを通して、「離れて暮らしていても大切に思える存在との出会いが、自分にはとれただけあったらどうか」と考えさせられます。皆さんも、この話を読むことで、これから

レインツリーの国

有川 浩（ありかわ ひろ） 井上先生
新潮文庫

主人公の向坂伸行は中学生の頃に読んだ、ある一冊の本が大人になった今も忘れられずにいた。ある時、その本の感想が書かれたブログを発見し、居ても立っても居られない気持ちになり、ブログの管理人にメールを送る。そこから、二人のメールの交換が始まり、伸行は次第に相手に会ってみたいと思うようになる。しかし、メールでは仲良くしていた相手は好きだけ

会いたくないと拒む。実は、彼女にはある秘密があった。このお話は、二人が障害を乗り越えて、惹かれあい、成長していく物語です。彼女の秘密とは何なのか、彼女の秘密を知った時に自分なら、どんな反応をするだろうかなどたくさんの方の考えをさせられます。また、世の中にはいろいろな人がいるのだということも改めて感じられる一冊です。

あなたは、誰かの大切な人

原田 マハ（はらだ まは） 名倉先生
講談社

みなさん、「どうせ私なんてつまらない人間だ……」などと卑屈な気持ちになったことはありませんか？

この作品には主人公の異なる六つのエピソードが入っているのですが、その六人いずれもが順風満帆とはいえない人生を送っています。ただ、それでも自分が大事にしている人や物、自分を大切に思ってくれる人を支えに一生懸命に生きています。

中学生にもなれば人間関係や家庭内の問題で悩んだり苦しんだりすることもあはす。そんな心が重くなったときに読んでみるといいかもしれません。読み終えた後は筆者からの「だから私も大切に思われていない人なんていないのだ」というメッセージに胸が熱くなりますよ。

本日は、お日柄もよく

原田 マハ（はらだ まは） 山本先生
徳間文庫

主人公の二ノ宮こと葉は、思いを寄せていた幼馴染の結婚式で衝撃的なスピーチに出会います。その祝辞の主である久遠久美に弟子入りしたこと葉は、政権交代を目指す野党のスピーチライターに抜擢されます。その過程で「言葉が持つ力」に目覚めていきます。みなさんも普段気持ちを伝える際に様々な言葉を使っていますね。感謝の気持ち、謝罪の気持ち、友愛の気持ち、恋慕の気持ち……。そんな言葉の持つ力を一緒に味わってみませんか？ 心が温まる一冊です。

つきのふね

森 絵都（もり えと） 中沖先生
角川文庫

主人公のさくらは進路に悩むちよつと冷めた中学生の女の子である日、派手でやんちゃな女子グループに誘われ、ほんの悪ふざけのつもりで万引きを始めます。最初は遊び気分でしたが、だんだんとエスカレートしていくみんなについていけないなりグループを抜けると無視されるようになってしまいました。

みなさんにも、嫌われるのが怖くて友達のことを断れなかったという経験、大切な友達と喧嘩をしてしまい、疎遠になってしまった経験、誰かを無視したり、誰かに無視されたりした経験があるかもしれませんね。

読み始めは「少し暗いお話だなあ」と思つかもありませんが、物語後半の疾走感はずいいですよ。ドキドキの展開、ぜひ楽しんでください。

しろいろの街の、その骨の体温の

村田 沙耶香（むらた さやか） 田邊先生
朝日文庫

中学のクラスって、大体五つほどのグループに分かれてる。リーダー格のイケてるグループや子供っぽいにぎやかなグループ、当たり障りのない普通グループやイケてないグループ。そんなスクールヒエラルキーの中で、自分の位置を、自分の居場所を確立するため、必死に背伸びしたり無理して人を見下したり。息苦しい。もっと正直に毎日過ごせたら楽なのに……。

中学のスクールライフの真実を描いたリアリティNo.1小説！ ドロっとした日常から爽やかな読後感へと皆さんを誘います。明日からの自分に勇気をくれる、心に刺さる一冊です。

続・ボクの妻と結婚してください。

樋口 卓治（ひぐち たくじ） 田中先生
講談社文庫

病気で倒れ、この世とあの世の狭間にいた修治は、死んでしまっ前に、やり残したことをどうしても果たしたいと考えます。それは、あまり笑わない息子の陽一郎に、笑いのコツを伝え、これからの人生を笑顔で満ちたものにするということでした。修治は生前の善行により、天国へ行けるはずでしたが、それを諦め、息子のために一週間だけこの世に戻ります。そして、小学生的の姿となり、転校生として陽一郎と再会を果たします。一週間で陽一郎は変わるのでしょか……？

この本を読んで、皆と一緒に学ぶことの楽しさや、人生を明るくするコツを教えられました。みなさんも、やりたくなくてもやらなければいけないことが、きつたくさんあるはずですよ。それを楽しめるようなヒントがこの本から得られるはずですよ。

アリバイ会社に用心

新藤 卓広（しんどう たかひろ） 松本先生
宝島社文庫

「鈴木アリバイ会社」はアリバイを作ることが仕事である。依頼客が内緒で遊びに行ったことを家族に信じさせる為に、アリバイ会社では嘘の証言をしたり、証拠を捏造したりする。

ある日、アリバイ会社に勤める右藤は、常連客である佐々木の殺害容疑で警察から事情聴取を受けることになる。右藤は釈放されるが、警察の疑惑は晴れないまま。そんなとき、自分のアリバイを崩してほしいという変な依頼人・藤寺が現れた。藤寺は佐々木殺害の犯人だと告白する。しかし、自首をしようにもアリバイがあるせいで自首が出来ないという。右藤は身の潔白を証明するために、藤寺のアリバイを崩す依頼を受ける。調査を進めるうちに明らかになった人間関係や真実をもとに、みなさんも藤寺の真の狙いを考えてみてはいかがでしょうか。

「天国」と聞いて、どんなところをイメージしますか。神様や天使がいる場所？ 美しく、苦しみのない世界？

主人公のさとしは、アロハシャツを着た得体の知れないおじいさんに突然連れ去られる。連れて行かれた先は「天国」。さとしは、「天国の本屋」に短期のアルバイトとして連れてこられ、朗読サービスを受け持つことになる。

日常の続きの天国を描いたちょっと不思議で懐かし、そして少し悲しい物語です。誰かに本を読んでもらった、あるいは本を読んであげた思い出があるなら、共感することもたくさんあるのではないのでしょうか。

暗いところ待たれどわ

宮村先生
幻冬舎文庫

上手くいかないことがあったり、自分のことが嫌になったり、心が少し傷ついてしまったら……優しい気持ちを思い出したい！ そんなときに、とっておきの一冊を紹介します。

駅のホームで起きた殺人事件の犯人として追われるアキヒロが身を隠すために逃げ込んだのは、視力を失くし一人静かに暮らすミチルの家でした。アキヒロは居間の隅にうずくまり、ミチルは他人の気配に怯えます。しかしミチルは自らの身を守るため、知らないふりをしようと決めるのでした。アキヒロとミチル、二人の奇妙な同棲生活が始まります。

二人がお互いの存在を意識しながら暮らす様子は、読んでいてドキドキします。読み終わると、きつと心が温かくなるでしょう。

武曲(むいく)

山田先生
文藝春秋

『打たれて感謝、打って反省、なんだよ、剣道は』

『小僧に斬られて……昭造に斬られて、おまえ、生きているな。有り難い。……斬られるというのは、初めてここに生きています。いや、まさに生きるということかも知れんあ……』

剣道五段の矢田部研吾がコーチを務める高校の剣道部に、初心者羽田融が友人に無理やり引っ張ってこられる。洪々と剣を握った融の姿に、研吾は「殺人刀」の遣い手と恐れられた父・昭造と同じ天性の剣士を見ることになる。剣を交えた者たちの高揚と緊迫が伝わる描写は息をのむほどすさまじい。主人公が剣道を通して生死と向き合い、自分の内面を見つめる姿から得るものは多いのではないだろうか。

「生まれてよかったと思った。はじめて思った。」主人公の夏見翔がこのように実感できるまでには、さまざまな人間関係における苦悩がありました。

中学二年生の夏見翔は、言葉を読み間違えたり言い間違えたりする難読症を持っていました。みんなと同じことができず、自分を本当に理解してもらえないことに生きづらさを感じていました。しかし、実は自分を取り巻く人たちにもそれぞれに悩みがあり、自分のことを思ってくれる優しいさがあると知り、苦悩を乗り越え精神的にたくましくなっています。

どんな人にも悩みはあります。つらいのは自分一人だけではありません。苦しみながらも前に進む勇気を持ちたいものです。そんな思いを抱かせてくれる心温まる一冊です。

老人と海

濱口先生
新潮文庫



アーネスト・ヘミングウェイ
キューバの年老いた漁師サンチャゴが、三日間かけて五、五メートルのカジキマグロを釣るお話です。

そのため、他人との会話は一切ありませんが、自分自身と対話する場面が多くあります。「時間をたくさんかけても最終的に逃げられるのではないか」「今のうちに諦めた方がよいのではないか」……。この作品は、そういった心の葛藤を楽しむ作品だと思えます。シンプルなお話の中で、「人間の心情」の愉しさを味わってみてください。

夢をかなえるソウ

平田先生
飛鳥新社

ダメな自分を変えたいけれど、何をやっても変わらない。そんな自分がまた嫌になっていく。そんな生活を続ける主人公の前に、ソウの姿をして関西弁で話す、とてつもなく胡散臭い神様「ガネーシャ」が現れます。

「自分が変わるために一番簡単な方法を教える」というので聞いてみるが、その方法は地味なものばかり。

ガネーシャの教えは、誰でもできるけれど意識しないとできないものばかりで、小さなことでも意識して行動していくことの大切さを教えてくれます。みなさんも、ガネーシャの教えを取り入れて、この夏、自分を変えてみませんか？

この本の著者は、日本に二十年以上住まれているイギリス人の方です。「イギリス人が傘をささない理由」や「母国を離れたイギリス人が懐かしがる食べ物」などが詳しく、わかりやすく書かれています。

そして、この本のおすすめポイントがもう一つ！ なんと英語と日本語の両方が対訳として書かれています。読みながら、英語の勉強にもなる！ 一石二鳥ですね。

みなさんにとって異文化を知るきっかけになればと思います。

甲子園が割れた日

高島先生
新潮文庫

一九九二年夏の全国高校野球選手権大会。三回戦で敗退したある高校の選手が試合後のインタビューでこうつぶやいたという。「甲子園なんてこなければよかった……」高校球児の夢である「甲子園」でそうつぶやかざるをえなかった原因は、その六日前におこなわれた二回戦の試合で起きた「事件」にあった。あの時、選手は、監督は、世間は……。

この本で取り上げられているのは高校野球の歴史の中でもかなり有名な「事件」ですが、関係者の「声」や「その後」まで知っている人は少ないでしょう。丹念な取材と豊富なインタビューで真相に迫る「ノンフィクションのおもしろさ」を、ぜひとも体感してください。

数の悪魔—算数・数学が楽しくなる12夜

中本先生
晶文社

「読書をしていると頭痛が止まらない……」という理系のアナタ、「数学のない世界に生まれたかった……」という文系の君。読書なんて、数学なんて、そんな気持ちはいったん置いて、数の悪魔との不思議な十二夜を過ごしてみないかい？

一だけで、ほかの数が全部つくれる？ どんな数も、素数だけで表せる？ ウサギが数学を知ってるって？ 数学には君たちが知らない不思議がたくさん。そしてそれらの不思議は、ほんの少しの読書で知ることができるんだ。一夜につき一話ずつ読み進めてみよう。十二夜が終わるころには君だって、読書も、数学も、捨てたもんじゃなくなって思えるはずさ。

十歳から百歳までの「子ども」のための深夜のレッスン。数の悪魔に会えるかどうかは、これを読んでくれた君次第。